



熊 熊 通 信



雑 感

札幌市医師会南区支部
竹嶋内科クリニック 院長
竹嶋 康 人

札幌市医師会南区支部で会計の仕事をしていただいておりますが、今回財務担当の役員への原稿依頼とのことで、この文を書くこととなりました。

支部の会計とはいえ私の場合、一般の主婦が家計簿をつけているのと同じようなものです。つまりうちのカミさんが社会体制や世界経済について疎いように、要望のあった医療環境、医療事情、経済状況について切れのいい説明や分析はとても無理です。ただ一言すべて悪くなったとしかいいようがありません。2,000字以内のこの原稿が、あとはただただ恨みと悪態で埋め尽くされていくというのは、正月早々うっとうしいことこのうえありませんし、読まれる方々にも迷惑だと思しますので、今まで感じたことを書かせていただきます（この文を書いているのは1月10日です）。

私が20年前開業した時、先輩の先生から「今までは良かったけれどこれからの開業は大変だよ、めげずに頑張りなさい」と言われました。勤務医時代は医者の仕事だけを行えば給料がもらえたわけで、経営のことなど考えたこともありませんでした。ですから医療費等についてはほとんど無知の状態、こんなズブの素人が開業し経営の世界に入っていくのは、一般の世界なら無謀なことです。それでも周囲の人たちに助けられてなんとかやってこられました。感謝しています。また開業当初は社会もまだ鷹揚だった気がします（ただバブルの最盛期で金利が高くて大変でしたが）。雲行きがあやしくなったのは、ご多分に漏れずバブルがはじけてからのようです。

収入が落ち込めば支出は削らざるをえない。家計

簿をつけているものにとっては当然のことですが、これが国のこととなると事情が多少変わります（事業仕分けでご存じのように削られる方だって必死です）。削るにあたって根拠となるもの、いわば正義が必要です。悪い奴を懲らしめるのは人生の快事です。ここはひとつ悪い奴から削りましょう。さしあたって適当なのがいなければいいのです。マスコミによる医者へのネガティブキャンペーンが始まったのはこんなことからだったと勘繰ります。

いつしか自分は水戸黄門にでてくる越後屋の役回りとなった気がしました（なにせ私の実家は服屋です、つまり服屋が化けた医者ですから、案外越後屋の血を引いているかもしれません）。どんな社会でも、できない人間や悪い奴はいるものです。医者への苦情や怒りが、この頃新聞に数多く寄せられていました、また「医師を正す」風のコラムも多く書かれていたと思います。そんなにひどい医者なら患者は誰も行きませんし、その時点で社会的制裁を受けていると思うのですが（もっとひどいお縄です）。社会的必要性のなくなったものが減っていくというのはこの世の常です。さすがに医者がなくなることがあるとは思いませんが、開業医というシステムがなくなることありうると思っていました。このまま診療報酬を削っていけば早晚、開業医は廃業せざるをえないからです。

一方このような中で新医師臨床研修制度が導入されました。これがすべての原因ではないでしょうが、これ以降地方の医師不足は加速化されました。都市部がいいかというそうでもなさそうです。東京に住んでいるある小説家が夜間胸痛の発作におそわれたが、受診できる病院はなかったそうです。彼は以降、夜間に事が起これば死を覚悟しなければならないと書いていました。

医者にとっても患者にとっても医療環境は良くないようです。そして先のネガティブキャンペーン以来、医者の士気の低下は……。

「昔は良かった」というのは、その時自分が良きにつけ悪きに付け若かったからで、ことさら物事を悲観的に感じていくのは老化現象の一つかもしれません。若いDrにとって（われわれにとっては最悪とも）今の状況は厳しくとも、これが基準となります（ものは考えようで始まりが底なら上がるしかありません）。もっとひどい時代だってあったのです。イタリアの思想家アントニオ・グラムシは、あのファシズムの嵐が吹き荒れる中、「意志の楽観主義」という言葉を残しました。未来は老人のものではなく、若い人達のものなのです。今後少しでもこの状況が改善し、若いDrのモチベーションが下がらぬことを願っています。

